郷 国立白門会ニュース

第47号
中央大学学員会
国立支部
発行者　山口康雄
042-574-5581

支部長就任挨拶

支部長　小島泰義

就任に際し　ひとことご挨拶もうしあげます。平成二十五年六月十六日開催の第三十六回定時総会におきまして支部長に選任され、就任いたしました。

国立支部会員の皆様に多くの温かいご支援をいただきましたことに対しまして、衷心よりお礼申し上げます。

私は昭和三十九年商学部を卒業し国立市役所に就職し、この年の新入職員のうちの四名が同窓生でしたので、先に先輩二名がおり計六名で市役所白門会を立ち上げ活動開始いたしました。その後市内に居住する市民の中から国立市の白門会を立ち上げる気運が高まり、大学から市内住所のOB名簿をいただき、その住所に居住しているか調査を行い、市白門会立ち上げの準備段階から参画いたしました。

その後　初代　故村田会長を擁し活動を開始し次期能味支部長のご指導のもとで発展をつづけ、掘田支部長、山口支部長と諸先輩のご努力で現在の国立支部を造りあげていただきましたご労苦に対しまして心より感謝申しあげます。

当白門会は同窓会員として同地域に居住し地域に密着した活動を行い、地域発展の一助となるよう企画、運営を進めて行きたいと思っています。

また、会員相互の親睦を深める行事に参加し、楽しいひと時を持つ機会の創設が必要だと思います。

また、母校発展のために会員がひとつになって大学関係者との交流の推進を図り、近隣支部の皆様と連携を深め積極的に交流を図っていく所存です。

今後、白門会が行います行事等に多くの会員の方々がご参加頂くことが会の発展につながることと考えておりますので積極的にご参加くださいますようお願い申し上げます。

最後に会員皆様のご支援ご協力を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

幹事長に就任して

上田邦雄

私は国立に居住してから早三十二年になります。国立白門会とは今は亡き風間健さんのお誘いで平成三年に入会しました。入会した当時、村田さん、福谷さんをはじめとして重厚な大先輩の皆さんが多数いらしゃる格式のある会であると認識しておりました。このような伝統ある国立白門会の幹事長に昭和四十四年卒業の若輩者の私が就任して良いか悩みましたが先輩がたの後押しによりお引き受けすることにしました。

先輩の皆様が培われた伝統を守りながら、新たなページを構築して行きたいと思います。皆様の知恵を拝借するとともに今までどおりの地域に密着した活動を更に推進し、愛校心の熱き思いを持っておられる同窓生の皆さんとの親睦を深め、母校中央大学の発展に微力ながら寄与して行きたいと考えています。是非とも役員の皆さんや会員の皆様方の心強いご支援・ご協力の程お願い申し上げます。

退任のご挨拶

前支部長　山口康雄

退任を迎えて、ひとこと、ご挨拶させていただきます。

平成十九年六月十七日、第三十回国立白門会総会において、支部長に就任し、はや三期六年が経過いたしました。

在任中は、会員の皆様に心からのご支援、ご厚情を賜り、厚く御礼申し上げます。無事、勤めあげ、ほっとしています。有難うございます。

この間、毎年、新年会、さくらまつり、定時総会、納涼会、くにたちウォーキング、一泊旅行、ホームカミングデー、市民まつり、学術講演会、クリーン多摩川等の行事に、大勢の会員の皆様とともに参加し、大盛況でした。

特に、まつり等の諸行事には、会員の奥様方に、お手伝いいただき、心からお礼申し上げます。

近隣各支部の総会にも出席させていただき、各支部の皆さんとも親しくなりました。

そして、地元の先輩、後輩、大学の関係者とも深く接することができ、心から感謝いたします。

そして、幹事長の石井さんには、ことばに言い尽くせないほど、お世話になりました。有難うございます。

会員の皆様、どうぞ、後任の小島支部長をささえて、国立白門会をさらに盛り立てて頂くようお願いいたします。

平成二十四年度 第三十五回 定時総会開催

平成二十四年六月十七日（日）せきやビル・エソラホールで総会及び懇親会を開催した。

総会ではそれぞれの事案が承認された後、ご来賓の吉田亮二常任理事から大学の現況とロンドンオリンピックで活躍した大学関係選手の紹介があった。

懇親会では、松本学員会副会長、柏木立川支部長、鎌田日野支部長、斉藤小金井支部長、川上小平支部長、新谷府中支部幹事長からご祝辞をいただいた。

室田せい子ジャズバンドによるジャズ演奏のアトラクションも加わり、会場は大いに盛り上がった。

最後は全員で校歌・応援歌を力強く歌い上げ、楽しい雰囲気の中、お開きとなった。

（集合写真　次ページ）

第35回　定時総会　24・6・17

新年会 フラメンコダンスに陶酔

一月二十日（日）、国立駅前せきやビル「エソラホール」において、新年会を開催した。平本聖子副幹事長の開会宣言で始まり、山口康雄会長の挨拶に続き、堀田勲顧問・前会長の発声で乾杯。会員関喜一「せきや」社長提供のシャンパンを瞬く間に飲み干し、会員の奥様や、日頃ご支援をいただいている市民のみなさんも参加して、大変賑やかに、また、華やいだ雰囲気の中でスタートした。

丸本大副会長、佐藤安氏から活動報告、石井孝幹事長からは直近に予定される川越七福神巡りや水戸偕楽園一泊バス旅行への参加の呼びかけがあった。

アトラクションのフラメンコダンスは七名の豪華な構成。総合プロデュースの会員北村佳達氏が、中大時代からの友人で長いギター歴を持つ富森秀直氏（昭和四二年法卒）と組んで一年前に立ち上げ、すでに　老人ホーム等各種施設や学校等で八回の出張公演をこなしているとか。足を踏み鳴らし舞台狭しと踊りまくるフラメンコ独特のリズムに、会場は情熱的な、あるときは感傷的な世界に引き込まれ、誰もが陶酔している。会場のあちこちから「オーレッ」「オーレッ」の掛け声がやまず、しばし熱気と興奮の渦に包まれ、予定の一時間があっという間に過ぎていった。最後は中大校歌の合唱と上田邦雄氏のエール、そして重野和夫顧問の中締めで、お開きとなった。

北井治徳　記

秋の一泊旅行 草津温泉でアクティビティに過ごす

恒例になっている秋の旅行は、平成二十四年十一月二十七日（火）、二十八日（水）の一泊二日　草津温泉　「ホテルヴィレッジ」で行われた。この日の参加者は、男性十四名、女性八名の合計二十二名。

立川発八時十五分ホテル専用のバスは、関越道所沢から高速道に入って、高崎経由で草津に向かった。特に高崎からは、草津街道といわれる山道を進んだので、カーブが多くバスは左右に揺れた。

昔、道路事情が悪い頃、このような道をバスガイドは、「ロマンス街道でございます」などとしゃれた説明をしていたことを思い出す。

草津近くになって、山の北側に残雪が目立つようになった。ホテルに到着後、各自で好きなメニューを選んで昼食を食べた。ホテルは、標高千メートルの広大な敷地の中にあり、ゴルフ場、スキー場、森林散策などのスポーツ施設の他、スパ温泉施設、温泉プール、ボーリング場、ビリヤード、などがあり、それぞれが好きなスポーツにさわやかな汗を流した。

宴会席は自由席。石井幹事長の司会で進められた。自己紹介などを聞きながら、懐石風の料理に舌鼓し、和やかに楽しく盛り上がった。宴会の後、幹事の部屋に集まって二次会が始まり深夜まで賑わった。

ホテルの各部屋は、ベッドのある洋室と、和室の二間続きに二人ずつ宿泊したので、ゆったりできて大変好評であった。

翌日は、午後のバス出発時間まで自由行動とし、前日に引き続いてスポーツ、スパ、あるいは草津温泉市内めぐりなど、時間的ゆとりの中でアクティブに過ごすことができたのが特徴といえよう。帰りのバスの中でも笑い声が絶えず、楽しいひとときであった。午後六時過ぎ無事立川に帰着した。幹事さんはじめ、ご参加の皆さんご協力ありがとうございました。

重野和夫　記

草津温泉　中沢ヴィレッジ　2012・11・27

草津温泉の名所　湯　畑

海の日」は恒例の納涼会

七月十七日（海の日）、昭和記念公園バーベキューガーデンで納涼会を開催した。会員・友人十五名が集まり、炎天下、肉や野菜を焼き、差し入れられたビール・ワイン・酒が飲み干されました。集合写真を撮り、立川の居酒屋で二次会と云いながら散っていきました。　石井 孝 記

さくらフェスティバル&「市民まつり」に参加

四月八日のさくらフェスティバルと十一月四日の市民まつりに参加しました。元祖「磯辺焼き」を販売しました。昼過ぎには完売し、残り火でイカや芋を焼き、親睦を深めました。

国立白門会　親睦ボーリング会

九月十二日親睦ボーリング会を開催した。会員佐藤安氏のホームレーン「立川スターレーン」に十一名があつまり、熱戦を繰り広げました。ゲーム終了後、佐藤氏から総評と表彰がされて、筋肉痛をほぐすために酒処へ移席した。

優勝　佐藤　安
二位　石井　孝
三位　市川良夫

学術講演会

世界のワインと日本のワイン

商学部教授　原田喜美枝

平成二十四年十一月十八日（日）午後三時より、商学部の原田喜美枝教授をお迎えして国立支部恒例の学術講演会を開催しました。

原田先生は、金融、証券化等がご専門でいらっしゃいますが、今回は「世界のワインと日本のワイン」と題して、主に日本のワインの特殊性についてご講演をいただきました。先生はワイン好きのご趣味が高じて、ワインエキスパートの資格を取得され、日本ソムリエ協会の会員でいらっしゃいます。

当日は、支部会員をはじめ、ワインに興味のある市民の方々が多く参加されました。「日本にはまだ・ワイン法・という法律がないため、いろいろな規制等が不徹底になってしまう。世界に肩を並べるワインの品質を保つために、早く・ワイン法・を制定することが望ましい」とのご見解に皆深く頷いていました。また、「酸化防止剤として添加されている亜硫酸塩は、酸化防止のためだけでなく、消毒、酵母の再発酵防止、赤ワインの色着きを良くする等、高品質のワイン造りには欠かせないものであり、日本人の多くが、悪者として評価しているのは必ずしも正しくない」とのことに、意外だったというような、どよめきがおこりました。

講演後、事前に先生に選んでいただいた、三種のワイン、「チリ産　ヴィーニャ・エラスリス」「フランス　ボルドー産・シャトー・メール」「酸化防止剤無添加表示の国産ワイン」の試飲会を行いました。

原田先生のご説明を伺いながらの試飲は、特に味わい深く、またそれぞれにワイン談義の花を咲かせ、終会の頃には　皆ワンランク上のワイン通になっていました。

平本聖子　記

原田喜美枝先生

春の偕楽園観梅と北茨城エリア旅行

貸切バスにて参加者十三人が三月十一日～十二日の一泊二日で、水戸市の偕楽園、北茨城市方面へ出かけた。

訪問先では専門説明員に依る観光案内、地理、歴史、の説明があり、弘道館＝旧水戸藩の藩校、ここで学んだ青年たちが尊王攘夷の革命児と育ち、その思想が日本中に広まる。又、最後の将軍徳川慶喜が短期間謹慎した。

偕楽園＝日本三公園の一つの梅の香り漂う観梅地。今年は寒さの影響か、まだ五分咲きでしたがポカポカの日差しの中、梅の香り花を楽しみました。好文亭にも上がり眼下に広がる千波湖を望む景観は絶景の一言でした。

北茨城地区の天心記念五浦美術館＝明治時代に活躍した思想家・美術評論家の岡倉天心が移り住んだ五浦海岸。天心や横山大観らの業績や作品が展示、五浦海岸六角堂、野口雨情記念館を見学。

更に、日立製作所工場の一つとその創業者小平記念館を見学（日立製作所創業当時の資料や歴史的製品を見ると共に製品加工や組み立て工場の中を車中から垣間見ることができた）。

宿泊先は北茨城で一番人気の「国民宿舎　鵜の岬温泉」、広大な太平洋を望めながら海の音で癒される時間をゆっくり過ごし、眼下に太平洋を眺めながらの温泉、チームワーク活動は皆で海岸や白波が砕け散る波を見ながらの散策を楽しんだ。

梅について、三月初めのある新聞コラムに、卒業や転勤で慌ただしくなる、梅はゆっくり咲いていつの間にか散っていく。一気に開花して乱舞する桜の激しさとは違い、こちらから気持を向けないと気づかない、平安時代までは「花見」といえば、桜の下で騒ぐのではなく、静かに梅を眺めることだった、とあった。

今回の旅行は香の下での静かな観梅、弘道館では藩校の歴史、北茨城や日立市では美術思想家や企業家の実績を垣間見ると同時に太平洋の見事な情景を楽しむ旅行でした。

最後に、白門会会員の方々から沢山のビール、チョコレートの差し入れ、又、早朝の見送りをいただきありがとうございました。

下村俊郎　記

晩夏光

市橋千鶴子（千翔）

いつのころからか、東京の桜の名所の一つに数えられている国立大学通りの桜が、今年は三月二十日過ぎに満開となり、四月三日中桜俳句会例会当日、我が家に集まられた会員の方々が異口同音に、「桜がまだ綺麗ですよ。」と仰しゃる。

折角の満開の桜を、医師の忠告に従って見にも出掛けられない私を慰めようと、まだ大分先の、四月十二日の私の誕生日を祝って、幹事の平本聖子（聖花）さんや藤村憲子さんが、見事な花束を抱えて入ってこられた。

見ると、二つ三つ開花した花をつけた桜三本を中心に、贅沢な花々をあしらった花束であり、治療薬の故で自己免疫力を失っていて、人混みのなかへ出られない私への優しいお心遣いが如実で、目頭が熱くなる思いであった。

加えて、記念撮影のために、三脚まで用意された藤村俊夫（雲閑）さんや、遠方からのお出掛けなのにカメラを持参された白石紀一（紀之字）さんのお気遣いのお蔭で、早やばやと九十三歳の千翔を囲んでの、記念の写真を撮ることができた。有難いことである。

その日の句会は、第四十五回中桜俳句会例会であり、選者の私の都合で句会を自習に切り替えて貰ったほかには一回の休みもなく、早くもあと二ヶ月で五年目に入るというから驚くほかない。

さらに、中桜俳句会の一年目から上梓された「年刊合同句集初桜」も、幹事長石井孝（孝山）氏はじめ会員諸氏のお骨折りによって第三集まで見事な出来栄えであり、手にされた誰方もが、和綴じの瀟洒な句集の外観に「ほう一見事ですね。」と感嘆のこゑをあげて下さり、ついで中味に目を通され、「よく勉強しておられますね。」と褒めて下さる。会員の方々は、白紙の状態から俳句を始められたにも拘わらず、短期間に俳句の骨法を心得られて、私の期待する作品を懸命に作って下さる。その作品を褒められることは、ご本人の何よりの励みになることであり、私自身もこの齢になって、沁々俳句を学んでおいてよかったと胸が熱くなる。

ノルマンディの羊の群れや
晩夏光　　雲閑

この作品は、「年刊合同句集初桜」第一集に掲載されている藤村雲閑氏のものであり、現在においても、自他ともに認める同氏の代表句のひとつである。

後に聞くところによると、同氏は夫人の憲子さんと共に、ベルギー在留のご長男の夏期休暇を利用されて、ご長男の愛車BMWのお車で若夫人も同行されてモンサンミッシエルなどのドライブ旅行を愉しまれ、句会の寸前に帰国されたばかりであったとのこと。当日の雲閑氏の出句はつぎの通りであった。

悠揚と白雲の飛ぶ晩夏かな
雲閑

句会の席上回ってきた清記用紙にしたためられたこの作品を一見して、兼題の「晩夏」を車窓に飛ぶ白雲に託し、去りゆく夏への名残りの感傷のこころを詠い、しかも季語「晩夏」に「かな」の詠嘆の切れ字を配してその情感を強調されたあたりは、とても初心者の作品とは思えない出来栄えと感じ入って、選評に当たっては特選として頂いた。

雲閑氏も憲子さんも、長い旅路を辿ってのご帰国早々とはとても思えないお元気さで、何と言っても親子水入らずの旅であり、しかもかねて雲閑氏の関心の的であったヨーロッパの中世の画家達の多くが好んで居住し、かつ風景を作品にとり入れていた、風光明媚な土地柄にご満悦のご様子、選評のあと話のついでに雲閑氏の作句の場所を伺ったのである。

ところが雲閑氏は、フランス西部ノルマンディ地方のゆるやかな丘陵に散在する羊の群を傍観されたり、美しい海岸線を訪ねられて、十七世紀の印象派の画家たちがこの地をこよなく愛した訳が理解できたと話された。

私も、亡夫と共に十数年前、モンサンミッシエルへの往復路として長い時間走った広大な田園風景に、あらためてフランスはパリばかりではないことを実感していたので、結論は早かった。

それだけの句材を捨てるのは勿体ない。雲閑氏と問答を重ねながら、車窓の景の「悠揚と白雲の飛ぶ」の措辞に変えて、それらの句材の存在する地名と感動の焦点となる羊の群れとに絞り、添削の結果、「ノルマンディの羊の群や」とまでは出来上がった。

折角の措辞「悠揚の」は白雲にかかる形容詞で、叙文であれば問題はないが、俳句はあくまで詩であるため韻律を無視することは許されない。通常の場合、形容詞的表現は「説明となるので」と厳禁されるところである。

つぎに地名を用いることは、十七音しかない俳句の場合には省略のためにこの上ない便利な方法である。ただし、俳句の普遍性を常に意識し、誰しもが理解している地名に限られる点を忘れてはならない。ところで、「ノルマンディの羊の群や」「晩夏かな」として、一句が完成したかに見えるが、大きな問題が残っている。

それは、俳句には五、七、五の定形があり、五と七、七と五、五のあとの何れかに、一句につき一か所の切れを入れて俳句の韻律を保持しなければならない。ところが「羊の群れや」という風に、中七に「や」の強い切れ字を配し、さらに下五の「晩夏かな」にも「か

な」の詠嘆の切れ字を配すると、これでは詩のリズムが保てなくなる。

そこで、季語「晩夏」を下五に相応しく五音の「晩夏光」の傍題に替えることとし、作者の雲閑氏も、この添削の結果には、「美しい季語ですな」と喜んで下さった。

「ノルマンディの羊の群れや晩夏光　雲閑」

まだ夏の暑さの残っているノルマンディの起伏の大地を風を切りながら走ると、草原に羊の群れが散在し、それらの景は去りゆく夏への哀歓とともに、そこはかとなく迫りくる秋への感傷と相俣って名画を見るような感傷を覚えた。よき旅であったというのである。

作者は、よい句になったと大層お喜び下さったが、この句は飽くまで雲閑氏ご自身の体験によって、ご本人の体感された「おもい」を句にされたに過ぎないので、多少選者の添削の手が入ったとしても、芭蕉さんの昔から作者の作品以外の何物でもないれっきとした藤村雲閑氏の記念すべき旅吟である。

実は、作者以上に喜んでいるのは私かも知れない。六五歳を過ぎてからの余戯として始めた俳句が、いまは唯一の晩年を慰める趣味として日々精進に励むほか、共に学ぶ句友と作句の喜びを頒ちあえること、これを生き甲斐と言わずして何と言うべきであろうか。俳句こそ、紛れもなくわが人生の「晩夏光」である。

別格三番　慈眼寺「穴禅定」参拝記

二宮　巍

平成二十一年七月及び二十二年五月と過去二回、慈眼寺の穴禅定に入るべく挑戦したが、いずれも先に団体さんが入っていて、二時間、三時間待たされると云うので帰って来た経験がある。

前回は立江寺の方から廻って行ったので遅くなったが、今回は宿からタクシーで直接行く。到着は八時半でした。

先ず慈眼寺の位置から説明しよう。慈眼寺は徳島県勝浦郡上勝浦町正木と云うところに在り、徳島市から歩いて南へ三時間、小松島の十九番立江寺から西へ約二十キロ、高さ五五〇Mの山の中に位置する。先ず、お寺の大師堂に到着する。そこからさらに一〇〇M上がった所に本堂がある。本堂には十一面観音が祀られている。そこから更に一〇M上に「穴禅定」（鍾乳洞）がある。

お寺に着いたら先ず大師堂にある納経所で穴禅定に入場する手続きをする。三〇〇〇円を支払い、穴禅定に入る為の白衣を借りる。お参りグッズを除いて荷物はロッカーに預けて行く。そこからは案内人（おばさん）の案内に従って行く。それから一〇〇M急な坂道を登って本堂に着く。そこでお参りグッズもカメラも預けて身体一つになって穴禅定に入る。一五センチのローソクを一本持たされて明りとする。真っ暗な穴の中に入って行く。入ってすぐに身体一つがやっと通過できる狭い二〇センチほどの細い通路を通る。案内人の案内の声が掛かる。「はいかがんで、はい手を上にあげて、横を向いて」と二〇M位の通路をくぐり抜ける。ちょっと立ちあがることも出来ないような場所を立ったり、しゃがんだりして通過する。やがて一〇分も経った頃に一寸した一息つける空間に出る。

そこで案内人が長い棒の先にローソクをかざしてくれた。その先に阿弥陀様、普賢菩薩、観音様と、自然の鍾乳石で固まった仏様が並んでいる。形は水滴が落ちて固まったものだが、仏様のように見えるから不思議だ。五M過ぎるとまた、「はいかがんで、足から伸ばして、うつ伏せになって」と立っては通れない所を這いつくばって通過する、それも左曲がったり、右へ曲がったり、とにかく狭い通路をたったりしゃがんだり、四苦八苦しながらだ。

一番奥の広場のような空間に出る。高さが五メートルもあるだろうか一寸した広場のような空間がある。

そこには弘法大師が祀られていて、般若心経をお唱えする。一〇分位、案内人の説明がある。その昔洞窟の奥には龍がこもっていて悪さをしていたそうな、それをお大師様が退治なさったそうです。

説明が終わって引き返す。また難行苦行である。最後に出口は入った通路とは一寸違って、「はいそこで這いつくばって、手から伸ばして」と、五〇センチ位の穴をくぐり抜けるのである。まるで母の胎内を通り抜けて出てきたような気分になるのです。

やっと光がさして来て娑婆に戻れた、と云うか改めて生まれ出たような感じになります。「穴禅定」の中は、距離にして二〇Mか三〇Mの往復であろうか、普通は三〇分前後で出てこられるそうだが、私の場合は五〇分掛かっていたそうです。それだけ体が硬くなっていて、動きがもたもたしていたのだそうです。

この「穴禅定」を無事お参り出来た人は・・・・

一、無病息災で長患いをしない。
二、金運、開運が成就する。
三、狭い所を通り抜けるので、入試、安産、交通安全が成就できる。
四、その他お大師様におすがりして様々の御利益が頂ける。

そうです。

インドの世界遺産と聖地ベナレス

重野和夫

世界遺産とはいったい何だろう。日本には、法隆寺や白神山地など十六件が登録されている。世界では、一八九ヶ国で九六二件あり、世界遺産の内訳は文化遺産、自然遺産、その両方を備えた複合遺産からなっている。

この二月、インドに二九件ある世界遺産のうち、代表的な世界遺産八つを見て回る機会を得た。どれもが寺院、建造物で文化遺産条約に示された人類の傑作、文化交流の跡、文化・文明の証拠、重要な建築物・景観などに相応しいものばかりであった。この中からタージ・マハルとカジュラホの寺院群の二つの世界遺産と、ヒンズー教の聖地ベナレスについて述べてみる。

タージ・マハル（世界遺産）

タージ・マハルは、日本からデリーまで飛行機で一〇時間三〇分、そこから約二〇〇キロ南西の地方都市、アグラの街にあった。世界で最も美しい建築物と言われているが、実は皇帝のお妃のお墓である。

訪れた日は、日曜日で大勢の人で混雑し、入館するのに長い人の列ができていたが、外国人専用の入り口があり、待たずに入館できた。

規模は横二五〇M、奥行き三五〇Mの白亜の大理石で造られ、高さ六七Mの巨大なドームの真ん中に、二つの大理石の棺が横たわっているだけであった。小さい棺が愛妃ムムターズ、大きい棺が皇帝シャー・ジャハーンのものという。

タージマハル（世界遺産）インド皇帝の愛妃の墓

この日、予定に従って妻はサリー、自分はクルタの民族衣装を着ていたので、私たちにカメラを向ける人、一緒になって写真を撮りたいという人など、周囲のインド人には好奇の目で見られたのは確かである。日本風で考えれば、青い目をした外国人が、着物姿で歩いているようなものなのだろうか。

さて、タージ・マハルにまつわる愛の物語は、次のようである。★

★　アクラの街は、古く紀元前三世紀のインド叙事詩に出てくる、イスラーム文化の薫り高い古都である。一六五三年ムガル帝国第五代皇帝シャー・ジャハーンが、愛妃ムムターズのために二十二年の歳月と、巨額な費用を使って建てた世界一豪華な墓だ。皇帝自身はヤムナー河対岸に黒大理石で墓を造る計画であった。しかし、帝位を狙って三男アウラングゼーブのクーデターによって、三キロ離れているアクラ城に幽閉されてしまった。

皇帝は失意の中で、アグラ城の幽閉された部屋から、遠くに見えるタージ・マハルを眺め亡き愛妃ムムターズに思いをはせていたが、七年後の一六六六年に亡くなってしまった。★

この日、アグラ城の幽閉囚された部屋（囚われの塔）も見学した。ここからは、ヤムナー河の上に浮かぶように見える、タージ・マハルが美しくて心に残った。

皇帝の墓づくりは、イスラームの教えに従って神の裁きを受けるまで、安泰の楽園を夢見たともいわれるが、現在のインドの宗教は、ヒンズー七五、五％　イスラーム一三％　キリスト二、三％　シーク一、九％　仏教〇、五％という。ヒンズーでは、散骨が主流か？。ガンジス河の火葬、散骨を思い出す。インドを回って、あまりお墓を見ることはなかった。インド民衆の墓は、大地にかえり、皇帝の墓は、観光地になり世界遺産となって、異教徒も混じる人々に踏み込まれている。地下の皇帝、王妃も安らかであろうか。

カジュラホ寺院群（世界遺産）

サルナート国際空港から国内線で、南西に五〇分飛んだところに、穏やかな田園の村カジュラホがある。この日スコールの中、カジュラホ空港に着陸した。停車した機内の窓を、雨が激しくたたいていた。やがて小やみになってからタラップを降りた。

カジュラホ寺院群は、チャンデーラ朝（九〇〇～一〇〇〇年）繁栄の跡である。大きく分けて、寺院群は西群、東群、南群とある。いずれもヒンズー寺院の外壁に祭られる、大胆なエロチック彫刻で有名である。

カジュラホ寺院（西群）

寺院外壁の天女像群

繊細、優雅なスラスンダリ（天女像）、ミトウナ像（男女結合像）など官能的な彫刻ばかりだ。

男女の結合の極み、神との統合する願望、生命力の根源的願望、など、現代人による解釈は自由だ。生活、戦争の彫刻もあり、人間の生きる全てが表現されていると思った。

「今日は、雨が降ったので女性のパワーが全開する」とは、カジュラホの現地日本語ガイドのアベリーシュ・ディバリーさん。田園の緑の中に佇む彫刻は、赤砂岩でつくられているが、触れれば柔らかく、雨に濡れてなまめかしく、あふれんばかりの生命力を漂わせ、一体一体が話しかけてくるようにさえ思えた。そして、彼は「すべては、ここから始まった」と、一対の見事なミトウナ

足のとげをぬく
スラスンダリ（女神）

像を指した。

寺院群は、一八三八年英国陸軍の技師TJバート大尉によって発見されたが、誰にも気づかれることもなく七〇〇年以上の長い間、ジャングルの中に眠っていたという。一部破壊されたところもあるが、大変綺麗に残されていると思った。

西群には三つの寺院があり、その一つの寺院には、リンガ（男根）を祭る高さ三〇Mを超える立派な塔があった。外壁には六四六体、内部に二二六体の像がある。さらに東、南寺院のスラスンダリ像、ミトウナ像を鑑賞には、幾ら時間があっても足りない。時間をかけて、ヒンズー教の描く神々から、人間の性を追求すれば、新しい発見と感動があるに違いないと思った。

カジュラホの建造物群は、一九八六年ユネスコに世界遺産として登録された。この他インドには、オルチャ遺跡など荒れたままの素晴らしい遺跡群・宮殿を見学したが、手を入れて整備すれば、間違いなく世界遺産になると思った。

聖地ベナレス

ヒンズー教最大の聖地、シヴア神の聖都「ベナレス」は、デリーから東南の方向六五〇キロ、ヒマラヤの水を集めた二つの河に挟まれているところにある。国内線でデリーから一時間二〇分だ。

またこの地名の呼び方が難しい。正式にはヴァーラーナスィーVaranasiだが、現地ではバナーラスBanarasといい、英語名では、ベナリースBenaresという。ベナレスというのは、英語読みの誤読だと言うが、私が利用する旅行業者の案内書には、ベナレスとあるので、あえて使うことにした。

ベナレスがなぜヒンズー教の聖地なのか。伝説によるとガンジス河が、神格化された女神Gangamataji（母なるガンガーさま）として崇められてきたことに由来するという。現地では、ガンジス河をガンガーと呼んでいる。

シヴア神の住む、ヒマラヤのカイラーサ山の水を集めたガンジス河は、悠々とインドの大地を流れ、シヴア神の額にかかる三日月形にカーブした場所（シヴア神第三の目か）、そこが聖地ベナレスである。ベナレスは、三〇〇〇年以上の歴史を持っている古い町である。

また、ベナレスでの時の流れは、大河ガンジス河のごとく壮大な輪廻（繰り返す変化）をたどって、すべての小道は川岸に通じていて、さまよっていると、いつの間にかガンジス河の川岸にたどり着くという。

川岸は、階段状になって川の水に没している。これをガートGhatといい、ベナレス旧市街の西岸には八四ものガートが存在している。

ヒンズー教の巡礼者や信者は、ひとときの現世を離れ、聖河に抱かれ浸りたいという「輪廻転生」（現世と来世を行き来する）の強い願望に結ばれているのか。これは、東洋思想、仏教に通じているように思う。般若心経の「色即是空」（空の世界）を連想した。

二月一四日夜は、ヒンズーの祭典バサント・パンチュミンが行われていた。

会場のガートは、明るく照明されてるので、聖火を掲げ、リズムに乗って踊っている様子は、用意された小舟の上からでも遠望できた。そこから少し離れた下流のガートでは、死者を火葬するいくつもの赤い炎が、暗い河の水に映っていた。近くの川面には、日本の灯龍流しを連想する、ローソクを灯したいくつもの小さな「花の船」が、ゆっくりとした流れに沿って動いていた。川風に乗って焼け焦げた異臭が漂い、マスクをした顔に当たる小さな虫を手で払いのけた。

「日常を絶する」としか思えない現場で、ガイドから、ベナレスという街の存在、死者を火葬する儀式、沐浴などの説明を受けてしばし絶句した。

翌早朝、死者を焼くため山と積まれた薪を横目に、再度ガンジス河ガートに案内された。小さな手こぎの船に乗って、流れに乗ってゆっくり下る。日の出前で気温が低く肌寒い。明るくなり始めてから、大勢の信者がそれぞれのガートで祈りを捧げた後に、沐浴を始めた。男性は上半身裸になって全身を浸し、女性はサリーを着たまま数人が集団になって、それぞれの方法で沐浴をしていた。また、他のガートでシーツなどを洗濯している光景も目にした。

祈り・沐浴

沐浴でにぎわうガート

さらに明るくなって、一日に一〇〇人の死者を火葬するガートが見えてきた。昨晩火葬された遺灰は、すでにカーストによってガンジス河に散骨されたのか。ガート周囲は、黒く煤けていたが人影がなく静かであった。

ガンジスの水は、決して綺麗ではない。汚れ、様々な浮遊物が流れて、場所によると異臭さえ感ずる。異教徒が目にする汚れなど、信者にとっては次元の違う話だろう。ここに年間一〇〇万人の観光客が来ると言うが、彼らの真剣な眼差しを見つめ、視線を感じて思ったことは「ここ、母なる河ガンガー・ガートは、観光に来るところでない」と。

最後に

早足で九日間のインド旅であった。人口約一二億二七〇〇万人。面積三二九万平方キロ（世界七位）公用語は、ヒンディー語、英語は補助公用語。日本に比べて人口一二倍強の多様民族、面積一〇倍弱。いままさに発展途上している国だと思った。気になることも多かったが、生活のためのインフラ整備は、力強く始まっていた。インドの車の半分は、スズキの車という事実を目にして、日本として日本人としてこれから、援助・協力できることはたくさんあると思った。冗談だが「自分にお金があったら、投資をしたい」くらいだ。

何よりも私は、インド人と接してどこか日本人に似ていて、親しみを感じてしまった。インドは大国であるが「国民の謙虚さ・誠実さ」の印象が強く心に残っている。

インドのこれからの発展を注視、心から声援を送りたい。

平成二五年三月一五日　記

参考文献

地球の歩き方インド

クリーン多摩川あれこれ

一九八六年（S六一）第一回多摩川河川敷清掃を実行委員会として実施して以来、今秋で第五十五回目を迎えます。二十七年の間この組織が継続してこられたのは、関係している団体のメンバーが中心となって支えて来た結果だと思います。

「継続は力なり」と言いますが、歴代の委員長のもとで企画立案し、実施して来たスタッフの方々の努力の賜物に他なりません。

河川敷の清掃という極めて単純な作業を、春秋二回実施して、参加する人々に飽きさせず、毎回新鮮な感覚で取り組むためには、企画とアイデアの発掘が大切です。幸い青少年育成団体の年間カリキュラムに組み入れて頂き、更に地域社会に貢献している大人の団体のバックアップが、大きな支えとなっています。又、行政側でも、青少年育成の一環として、全面的に協力して頂いていることは、官民一体の事業として継続できたのだと思います。国立市に居住していて、多摩川に来たことのない市民もいて、この機会に、自然と親しむ楽しさを味わってもらいたいものです。

委員会では、十年に一度の節目に活動報告冊子を発行しています。三十周年にはその集大成を刊行出来ればと思います。参加するのは団体単位だけではなく、一般市民にも市報を通して広報して、参加を呼び掛けています。幸い、年々一般市民の親子の参加が増えて来ていることは、喜ばしいことです。

早朝から野鳥の観察や河川敷の野草の定点観察も実施しています。清掃のあとには、うどんの給食を用意して、楽しんで頂き、子供達のクラフト遊びや、小学生の水質検査の実習等、もり沢山の催しもあり、子供達には、楽しみな半日となっています。来る第五十五回記念イベントとして、多摩川上流域から国立拠点までの川べりウオーキングを併用する計画があり、足に自信のある人に参加してもらいます。昼食時までに国立市の拠点へ到着するようスタッフ一同企画しています。

十月の環境フェスタに魚のオブジェとのぼりを展示します。

クリーン多摩川

国立実行委員会　丸本　大

敬弔　田口正明

風間前幹事長を悼む

国立白門会の発展にご尽力された風間さんが亡くなりました。

昨年7月、市内でご遺族同席のもと、風間さんを偲ぶ惜別の会が聞かれました。人生は無常といいますか、風間さんに先立たれ人生の儚さを痛感しております。

国立市議会の議員として、骨身を惜しまず市民のために尽力されました。ラジオ体操は、その一例です。わたくしも、時折、参加させていただきました。早朝でのラジオ体操は、心身ともに体をリラックスさせてくれます。風間さん健在ならば、今もさわやかなラジオ体操の音楽が聞こえたことと思います。残念ながら、風間さんが病に伏すころより、中断していると聞きおよんでおります。

わたくしが風間さんと親しいお交わりをいただくようになったのは、演能会です。今から数年前、神楽坂の矢来能楽堂でのことです。妻の田口照美が、能「羽衣」を演じることになりました。ご案内状を差しあげましたところ、奥様とご一緒にお出でくださりました。当日は天候にもめぐまれ、会場はほぼ満席となりました。おかげさまで、盛会のうちに無事お開きになりました。

当日、能楽堂へ足を運んだのは初めてという方が、少なくありませんでした。それからお会いするごとに、伝統芸能の歌舞伎や文楽それから能楽について、ディスカッションされました。よく勉強されておりました。

昨年、東京スカイツリーの竣工記念に番囃し「隅田川」を、妻の田口照美が演じました。「隅田川」の舞台となったところが、スカイツリーの隅田河畔ということで演じました。病のため奥様とご一緒にご観覧できずたいへん残念でした。

末筆となりましたが、謡曲の融（とおる）の一節をご霊前にお捧げいたします。

あら　名残り惜しの　面影や
名残り惜しの　面影

アルジェリア人質事件の犠牲者を悼む

人質事件は、アルジェリアの天然ガス生産施設で起こった。武装したイスラム過激派が、外国人を人質にして、フランス軍の撤退を要求した。アルジェリア政府はこれを拒否し、軍事作戦を強行した。その結果、外国人の人質三七人が死亡した。うち十人が日本人であった。

アルジェリアは、アフリカ北部に位置する。第二次世界大戦後フランスから独立した農業国家であったが最近は石油や天然ガスなどを産出するようになった。

一方、資源のないわが国は、国策として海外より資源を輸入し、自動車や家電製品に加工して輸出した。海外事業は、国策として奨励された。

アルジェリア天然ガス事業も、わが国にとっては重要なエネルギー事業である。まさしく亡くなられた方々は日本のエネルギー問題、高度経済成長を支える旗手であった。

アルジェリアの人質事件で貴い命を落とされた方々に、心より哀悼の意を表したい。

故風間　健　様に感謝

昨年の支部総会の十日前の六月七日、前幹事長の風間健様がご逝去されました。永年国立市議会議員として、また我が国立白門会会員として、当会の発展のために多大のご尽力をされました。会員一同、心から感謝したいと思います。

前号の国立白門会ニュース四十六号はすでに刷り上がっておりましたので、会員の皆様にお知らせできませんでした。あらためましてご報告いたします。

編集部

国立白門会に入会して

下村俊郎（四十二年卒）

私は、平成二十三年十二月に会社勤めを終え、第二の人生が始まり生活の軸足を会社の仕事から地元へ移動する必要を感じ、これまで接触したことは無かったが、市民祭の「いそべ焼き」の味わいを通じて白門会に少なからず関心を持っていたので二十四年六月に石井幹事長に電話、自宅に届けられた国立白門会創立三十周年記念誌、二十四年度白門会ニュースを通読、伝統ある国立白門会の一員になろうと決心し、即入会した次第です。

入会一年で私が感じたことは、国立在住やその周辺の中央大学卒業仲間が意気盛んに交流し、母校に対する深い思いを持っていること，たとえ年代が違っても、同じ学窓で学んだ会員はそれぞれ皆が認め合い、支え合い、ぬくもりある組織的な集まりだ！　ということです。そして、皆さんが国立白門会の運営に情熱（Passion）、使命（Mission）を持ち続けていることを頼もしく思いました。又、市民祭、地域の支え合い、国立のまちづくり等のボランティア活動に自から進んで参加をしている姿が印象深いものです。

それと、その日の会議や行事が終ってから楽しく皆さんとビールでのどを潤し、酒、ワインを賞味しながらの時間はとても幸せです。時には二次会があり酒宴会大好き人間の私としては、多くの仲間と会話を楽しむが酩酊は避けられず、翌日の二日酔いが今一番の悩みとなっています。

私は国立に昭和四十九年に転居、貿易マンとして家を長期間留守にすることが多く、一橋大学周りの常緑樹と落葉樹の組み合わせが維持された森と大学通りがうまく調和しているこの素晴らしい町を余りにも知りません。たとえば、第三公園集合と云われても何処かが分からなかった。今でも幹事長や会員の方々に教えを受けています。

海外駐在は二十数年、台湾（重工業主体へ切替の昭和五十年頃）、中国北京市（対外開放政策、四つの近代化の昭和五十五年頃）で国の発展戦略と経済改革をトップリーダーが先頭に立ち奇跡の発展を推進した時期、アメリカは三度の駐在で計十四年（昭和五十九年頃、平成二年頃、平成十五年頃）。　又、出張ベースでアジア地域、ヨーロッパ地域の各地にも度々訪れる機会にも恵まれた。

私の国立白門会でのモットーは情熱を持ち続けることと海外経験を生かし地域社会においても「Think globally, act locally＝グローバルに考え、ローカルに行動」で活動します。

私は入会した以上ライフ・ワークの一つとして少しでも役立つ一人であり続けたいと思います。皆さん、これからもどうぞよろしくお願い致します。

（編集部　三ページ納涼会の写真後方右端が下村さんです）

まぼろしの出雲そば

堀田　勲

中央大学を卒業してから五十年、半世紀が経過しました。先般、それを記念して新宿の京王プラザホテルで同期のパーティがありました。集まった面々を見ていると、学生時代の面影は全くなく、みんな卒業後どんな人生を送ったのかな、すでに他界した人も多くいるのだろうな、出席したくても、色々の理由で出席できない人も大勢いるのだろうな。そんなことを思ってしまいました。こうして元気で同期の皆さんと再会でき、肩を組んで校歌を歌うことができる幸せを痛感しました。

また、北海道の旭川から上京するとき、駅のホームで見送ってくれた今は亡き両親にも、この日を見てもらいたい、また、感謝しなければならないと思いました。

さて、卒業後五十年を記念する「記念誌」を発行するにあたり、何か学生時代の思い出を書いてほしいと言われ、ふと、思い出した表題「まぼろしの出雲そば」を書いてみました。掲載された本文を皆様にも読んでいただければと思います

★

大学の二年生のころだと思うが、いつもの通り神保町の方に親友とお昼を食べに出かけた。「どこにしようか」と話しながら三省堂や東京堂の前のメイン通りの一本裏の通りだと思うが歩いていると、小さな「出雲そば」と書いた看板の出ている、そば屋を見つけた。「あそこにしよう」ということで店に入った。

五つほどのテーブルがあり、空いているテーブルに座って周りを見るとスーツを着込んだ年配のビズネスマン風のお客ばかりで学生などは一人もいない。店の造りも老舗らしく、いつも行くそば屋と全く違う。ここで初めて二人は場違いな店に入ってしまったと気が付いた。逃げ出すわけにもいかず顔を見合わせていると、店員が「三段にしますか五段にしますか」と言う。

出雲そばがどういうものか分からないままに成行きで「五段で」と言ってしまった。しばらくすると丸い漆塗の器に入った五段重ねの　そばが運ばれてきたのにはびっくりした。これは高いぞ、お金はだいじょうぶかなと思い、そっとポケットに手を入れてみた。どうにかここはだいじようぶと思ったが明日からの食事代をどうしようかと心配になってしまった。親友は新宿の親元から通っているが、

私は地方出身で親からの仕送りと、少々のアルバイトで暮らしている。代金はいくらだったか、翌日からの食事はどうしたのかは覚えていない。

味はどうかというと、これまた、お金が心配で味わう余裕もなく、まったく覚えていない。しかし五段のうちの一段にウズラの卵が入っていたのを覚えている。

あれから五十年が経過した。先日、同期会会長から何か学生時代の思い出を書いてほしいと電話をいただき、そうだ、あの時の強烈な思い出と、お金を心配せずにゆっくり味わう「出雲そば」の味を書こうと思い、わざわざ神保町に出かけてみた。ちょうど古本市が開催されていて多くの人で賑わっていた。記憶を頼りに地図を見たり人に聞いたりしたが、なかなか見つからない。そのうちに老舗らしい和菓子屋があったので、そこで聞いてみた。「うちの裏にあったのですが三年ほど前に廃業しました」との答え。どこか近くに引っ越したのではないかと聞いてみたが「やめてしまったようですよ」との返事。もう三時を過ぎている。出雲そばを食べようと、今まで何も食べていない。暗い空から雨がポツポツ降ってきた。傘もない、目的を達せないまま、都営地下鉄神保町駅に駆け込んだ。結局何も食べずに帰宅してしまった。五十年の時の長さを実感した。タイトルはすでに「五十年ぶりの出雲そば」と決めて、その味を書こうと思っていたが、それもかなわず、「まぼろしの出雲そば」になってしまった。

懐かしい校舎

私のアルバムから　昭和37年頃撮影

いっしょにそばを食べに行った友と

昭和37年頃の駿河台校舎

平成24年度　国立白門会決算書

自 平成24年4月1日　至 平成25年3月31日

収入の部			支出の部		
科目	決算	予算	科目	決算	予算
前年度繰越金	40,059	40,059	印刷費	87,150	100,000
			総会費	182,797	200,000
年会費	174,000	240,000	事業活動費	142,853	50,000
総会会費	135,000	150,000	親睦行事費	64,155	200,000
行事活動特別収入	98,644	50,000	通信費	74,995	50,000
寄付、祝金	85,000	100,000	会議費	30,450	30,000
学術講演会	300,000	300,000	事務用品費	11,391	30,000
支部活動強化費	74,250		学術講演会開催費	90,178	
雑収入	14		雑費	17,897	10,000
			予備費		210,059
			次年度繰越金	205,101	
合計	906,967	880,059	合計	906,967	880,059

平成25年6月16日

会計　真見　敬　印

会計監事　二宮　巍　印

平成25年度　国立白門会予算案

自 平成25年4月1日　至 平成26年3月31日

収入の部			支出の部		
科目	摘要	金額	科目	摘要	金額
年会費	3000円×80	240,000	印刷費	白門会ニュース	100,000
総会会費	5000円×30	150,000	総会費		200,000
特別収入	さくら祭、市民祭	50,000	事業活動費	近隣支部総会祝金	50,000
寄付、祝金		100,000	親睦行事費	納涼会・新年会他	200,000
学術講演会	大学より補助	300,000	通信費	会員連絡他	50,000
			会議費	役員会他	30,000
			事務用品費		30,000
前年度繰越金		205,101	雑費		10,000
			学術講演会開催費		300,000
			予備費		75,101
合計		1,045,101	合計		1,045,101

平成24年度活動報告　24・4・1～25・3・31

* 4/ 8(日)　「さくらフェスティバル」に参加
* 6/17(日)　第35回定時総会「せきやホール」
* 7/17(火)　納涼会「昭和記念公園」バーベキュー
* 9/12(水)　ボーリング会「立川スターレーン」
* 9/26(水)　ゴルフ会「青梅C・C」
* 10/ 8(月)　体育の日「くにたちウオーキング」
* 10/28(日)　ホームカミングデー
* 11/ 4(日)　「くにたち市民まつり」に参加
* 11/18(日)　秋のクリーン多摩川
* 11/18(日)　学術講演会「日本のワインの特殊性」
* 11/27(火)　草津温泉一泊旅行
* 1/20(日)　新年会「せきやホール」
* 3/11(月)　水戸偕楽園観梅バス一泊旅行
* 3/17(日)　春のクリーン多摩川

○ 白門会ニュース46号発行
○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催

平成25年度活動計画案　25・4・1～26・3・31

* 4/ 7(日)　「さくらフェスティバル」朝雨出店中止
* 6/16(日)　第36回定時総会「せきやホール」
* 7/15(月)　納涼会「昭和記念公園」バーベキュー
* 9/11(水)　ボーリング会「立川スターレーン」
* 10/13(日)　中大学術講演会「せきやホール」
* 10/14(月)　体育の日「くにたちウオーキング」
* 10/27(日)　ホームカミングデー
* 11/ 4(月)　「くにたち市民まつり」に参加
* 11/　秋の一泊旅行（詳細未定）
* 11/17(日)　秋のクリーン多摩川
* 11/　ゴルフコンペ（詳細未定）
* 1/19(日)　新年会
* 3/16(日)　春のクリーン多摩川

○ 白門会ニュース47号発行